

平成 29 年 12 月 11 日

世田谷区立烏山小学校 家庭教育学級

言葉に気をつけてみませんか ー美しい日本語はご家庭からー

若井田 正文

- 言葉を慈しみませんか
人が、愛おしみ、大切に使うことで、言葉もすこやかに育ちます。
- 教科「日本語」創設の宣言文

ことば。
ことばには力があります。
私たちは、たった一つのことばから生きる勇気を得ることがあります。
ことば。
私たちは、ことばを使って考えます。ことばを使って考えや思いを伝えます。

私たちのかけがえのない宝である「日本語」は、日本の文化とともに受け継がれてきました。

新たな文化が生まれ、新たなことばが生まれます。

あることばが使われなくなるということは、そのことばの背景にある文化や自然が失われることにほかなりません。

今、私たちはことばを大切にしているでしょうか。

世田谷区では、教科「日本語」を創設しました。

子どもたちが、ことばの大切さに気づき、ことばを通して深く考え、自分を表現して心を通わせる喜びを知り、日本文化を大切に、新たな文化を創造してほしいという願いから教科「日本語」は生まれました。

1. 言葉には力がある。

- 忘れ得ぬ師の言葉 小川誠子（ともこ）さん
木谷實九段「自分が怖いときは相手も怖いんだよ。勇気を出しなさい」
- 父の友人
「君のお父さんの信条は、人の良いところを見て暮らす、人の過去にこだわらない」
- 道元
「愛語は愛心よりおこる。愛心は慈心を種子とせり。愛語よく廻天の力あることを学すべきなり。」

2. 言葉で考え、言葉で表現する。

○ 論理の力

「論理の力とは思考を表現する力、あるいは、表現された思考をきちんと読み解く力。それは言葉を自在に扱う力、日本語の力のひとつ。

考えるためにもっている唯一の翼が、言葉。いろいろな言葉をもっている人は、いろいろな可能性を試せる。新しい言葉を手に入れたなら、新しい可能性が開ける。」

(日本語「哲学」から、野矢茂樹さん)

○ 豊かな表現

- ・ 聴いてごらん どんな雨 春雨 五月雨 夕立 秋雨 時雨
(日本語「2年」季節を感じることはばを探そう)
- ・ うつくしい あざやか あでやか きらびやか たおやか はなやか
秀麗 流麗 綺麗 豊麗 華麗 華美 秀美 優美 優雅 絢爛

3. 言葉には文化の背景がある。

○ 文化の背景

- ・ ワンガリ・マータイさん ノーベル平和賞受賞
田中耕一さん ノーベル化学賞受賞
- ・ 日本語で考えられる幸せ 一江戸時代の「言葉の力」は高かった。
西周 (1829 - 1897)
「哲学」「藝術」「理性」「科学」「技術」「心理学」「意識」「知識」「概念」
などの訳語を創る。
- ・ 広辞苑に見る柔軟な日本語
和語 (やまとことば) 約 45 %、漢語 約 45 %、カタカナ外来語 約 10 %

○ 自然の背景

- ・ 春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて すずしかりけり (道元)
- ・ 教科「日本語」の教科書を貫く縦糸は「季節」

4. 日本語の響きとリズム

- ・ あかあかや あかあかあかや あかあかや あかあかあかや あかあかや月
○ bright, bright, ○ bright, bright, bright, ○ bright, bright.
Bright, ○ bright, bright, Bright, ○ bright moon. (明恵)
- ・ 朗誦の効用 脳の活性化
- ・ 水を渡り また 水を渡る 渡水復渡水
花を看 また 花を看る 看花還看花
春風江上の路 春風江上路
覚えず 君が家に到る 不覺到君家

5. 言葉について 提言

- (1) 子どもの「よさ」を言葉に表しませんか。
- (2) 子どもの声に耳を澄ましませんか。
- (3) こどもの言葉を待ちませんか。
- (4) 機会をとらえて (On the Chance) 一言言いませんか。
- (5) 主語をはっきりとさせませんか。

PTA 会員の皆様

文化厚生だより NO.7

鳥山小学校 P T A
 会 長 鈴木 奈保子
 文化厚生委員長 佐藤 雷絵

《第三回 家庭教育学級活動報告》

文化厚生委員会では12月11日に第三回家庭教育学級を開催いたしました。お忙しい中、82名の方に参加していただき、盛況のうち終了いたしました。ご出席いただきました皆様ありがとうございます。

日 時： 12月11日(月)10時00分～11時30分

場 所： 本校 1階 ランチルーム

テ マ： 「言葉に気をつけてみませんか～美しい日本語はご家庭から～」

講 師： 若井田 正文 先生

教科「日本語」教科書 全6冊 (編集責任者兼著者)、二松學舎大学 特別招聘教授

参 加 者： 社会教育指導員平田様 坂本校長先生 保護者82名

言葉を慈しみませんか

人が、愛おしみ、大切に使うことで、言葉もすこやかに育ちます。

ことば。

ことばには力があります。

私たちは、たった一つのことばから生きる勇気を得ることがあります。

ことば。

私たちは、ことばを使って考えます。ことばを使って考えや思いを伝えます。

私たちのかけがえのない宝である「日本語」は、日本の文化とともに受け継がれてきました。

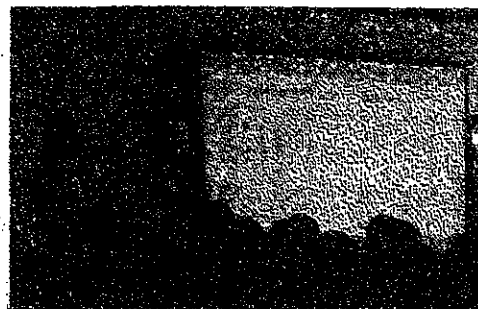
新たな文化が生まれ、新たなことばが生まれます。

あることばが使われなくなるということは、そのことばの背景にある文化や自然が失われることにほかなりません。

今、私たちはことばを大切にしているでしょうか。

世田谷区では、教科「日本語」を創設しました。

子どもたちが、ことばの大切さに気づき、ことばを通して深く考え、自分を表現して心を通わせる喜びを知り、日本文化を大切に、新たな文化を創造してほしいという願いから教科「日本語」は生まれました。



1. 言葉には力がある

私たちはたった一つの言葉から生きる勇気をいただくことがある。反対にひとつの言葉で傷つくこともある。言葉、まごころからでた言葉は大きく社会を変えるくらいの力がある。子ども達に元気がでるような声掛け、生きる勇気をもてるような声掛け、明るくなれるような声掛けをしてほしい。

2. 言葉で考え、言葉で表現する

○論理の力

言葉の力に敏感になること、それが「論理的」になる道。

「考えるためにもっている唯一の翼が、言葉。いろいろな言葉を持っている人は、いろいろな可能性を試せる。新しい言葉を手に入れたなら、新しい可能性が開ける。」（日本語「哲学」から野矢茂樹さん）

今、論理的な表現をするということがとても求められている時代。そういう背景により平成30年に発表される高校のカリキュラムとして論理国語という科目が登場する。

○豊かな表現

聴いてごらん どんな雨 春雨 五月雨 夕立 秋雨 時雨

この言葉を選んだ時に2年生には難しすぎるとかなり言われたが、大人から考えると難しいと思うことも、子供はあまり意味が分からなくても心の中に入れることができる。

心の中に一度入れておくと、忘れてもまた出合った時に思い出すので、心の中に入れることはとても大切。

3. 言葉には文化の背景がある

○文化の背景

田中耕一さん ノーベル化学賞を受賞。

北陸生まれの商家育ち、お婆ちゃんの口癖「勿体無い。勿体無い。」

ある時、非常に高い値段の薬品を間違えて混ぜてしまい捨てようとしたが、お婆ちゃんの言葉「勿体無い」を思い出して捨てずにいた。その合成が実はノーベル賞を貰うきっかけとなった。

理科系の分野であっても文科系であっても、日常生活であっても言葉の背景には文化がある。

○自然の背景

4つの季節がそれぞれ美しい日本の風景を大切に理解してくれる子供を育てたいと考え、教科「日本語」の一つの縦糸として季節というものを設定した。

4. 日本語の響きとリズム

○朗読（脳の活性化）→ 音声言語（話す、聞く） 文字言語（読む、書く）

脳が活性化するのは、脳科学では意味がわかって音読するのと、意味がわからずに音読するのとでは同じだそう。

5. 言葉について 提言

ご家庭で言葉について気をつけてみませんか。という提案。

- ①子どもの「よさ」を言葉に表しませんか。
- ②子どもの声に耳を澄ましませんか。
- ③子どもの言葉を待ちませんか。
- ④機会をとらえて一言言いませんか。
- ⑤主語をはっきりとさせませんか。

子どもたちも自分の力で伸びていくような環境を与える、つまり「待つ」ということ。

<若井田先生のエピソード>

子どもが思春期の時に反抗し口を利かなくなりました。あまりにも心配なので一度散歩に連れ出し、二時間くらいかけて多摩川まで散歩したことがあります。何か悩んでいるのか尋ねると「うん」だけで、待っても待っても言葉は出ませんでした。次の言葉を待っていたら多摩川着いてしまいました。大人になり、その時の話題がでたことがあります。彼はその時ずっと一緒に歩いてくれた。私から話しかけたことは二言でしたが、父さんが自分の事を心配してくれていることが分かってすごく嬉しかった。と言っていましたので言葉を待っていた甲斐がありました。

教科「日本語」創設の経緯

- ・平成16年12月 世田谷「日本語」教育特区(構造改革特区)内閣府より認定される
- ・平成19年4月 授業開始
- ・平成20年 教科「日本語」が第48回『久留島武彦文化賞』受賞
(青少年文化の向上と普及に貢献した団体に贈られる賞)

<日本語の教科書作成時の思い>

★若井田先生の日本語の教科書作成時の思いをメールの抜粋ですが、一部掲載させていただきます。

日本語3冊の教科書の後ろに、漢詩の訳が載っています。また、論語の文にも訳が載っています。あの訳は私が書いたのです。教育長としてのさまざまな職務の合間に、さまざまな文献を読みあさり、小学生に向くように書きました。

しかし、授業が始まってから1年目に、日本漢文学会(名称は正確ではありませんが、漢文を専攻する学者たちの学会です)から、20箇所以上の「誤っている」という指摘がありました。

1箇所は教科書作成時点の校正ミスでしたので、指摘通り直しました。

残りの20箇所以上につきましては、私が一つ一つ、教科「日本語」を読む小学生の発達段階について触れながら反駁し、すべて納得していただきました。

近代の作品は、世田谷区に在住したことのある作家から選びました。世田谷区に住む子供たちに世田谷区にゆかりのある作家たちのことを知ってもらいたかったからです。

たとえば全万葉集に玉川を歌った歌はたった1首しかありませんが、それを教科書に載せました。世田谷区と神奈川県の間は玉川ですから。

俳句は、一茶→子規・蕪村→芭蕉という順序に致しました。芥川龍之介が「芭蕉雑記」に書いているように、芭蕉の俳句には「調べ」があり、その格調高い「調べ」を理解することは高学年でないと難しいと思い、5・6年生に載せました。

和歌も、道元の「春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて すずしかりけり」、「あかあかや あかあかあかや あかあかあかや あかあかあかや月」を初めにおいて、3・4年生で百人一首をカルタで楽しむ時間を入れた後、高学年では万葉集を主にしてあります。万葉は、日本にとどまらず世界の文学であり、世界の宝です。

「日本の誇るべき万葉を子供たちの心に入れたい」、その私の切実な願いです。

教科書の、一つ一つの題材、たとえば3年生の「世田谷区の地名の由来」では、世田谷区の地名に関する明治からの文献を夜中まで読み、「烏山は、『耕作地』を山と言っていたようです。また、農業をする人々にとって身近な土の色が黒かったことから、『烏』という字を当てたという説があります。」と書きました。「説があります」と書きましたのは、教育委員会が作成する教科書で誤りは許されないからです。

少なくとも教育委員会が作成する教科書ですから、誤ったことを載せるわけにはまいりません。すべての題材について、念には念を入れて調べ尽くしました。

たとえば、中学校の「日本文化」の教科書では、食の季節「旬」の次に、それらを保存する「発酵文化」に関する文章を載せましたが、その文章を選ぶため、九州の宮崎、椎葉村まで足を運びました。